



( Photo by (c)Tomo.Yun )

<http://www.yunphoto.net>

**必要なだけしか獲らんこと。**

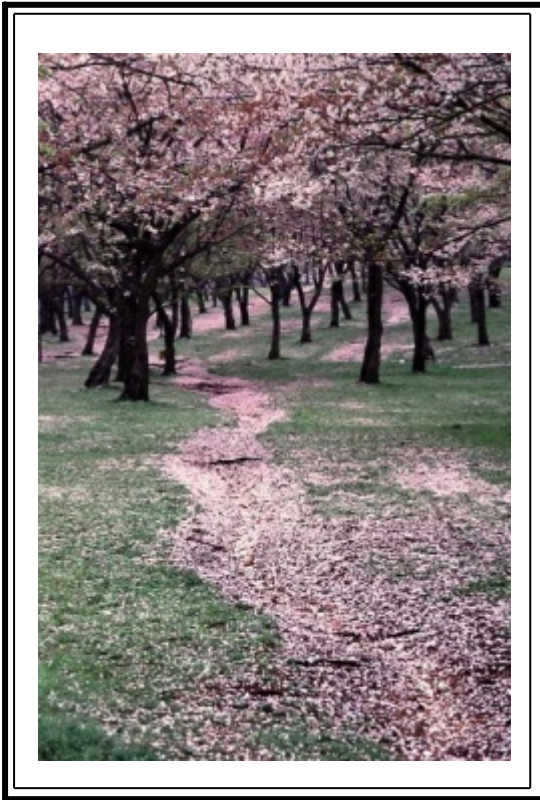
**鹿を獲るときはな、いっとう立派なやつを獲っちゃならねい。**

**小さくてのろまな奴だけ獲るんじゃ。**

**そうすりゃ、残った鹿がもっと強くなっていく。**

**そしてわしらに肉を絶やさずに恵んでくれる**

『リトル・トリー』より



みんなおまえが来たのを知っている  
森も、森を吹き抜ける風も  
父なる山が、子どもたちに  
歓迎の歌を歌わせているのさ  
みんなリトル・トリーを  
こわがらない  
リトル・トリーの  
心のやさしさを知っているからね  
みんな歌っているよ、

「リトル・トリーはひとりぼっちじゃない」って

『リトル・トリー』より

リトルトリーはあなた自身です。森に受け入れられているあなたを感じてみましょう。



( Photo by (c)Tomo.Yun )

<http://www.yunphoto.net>

山の頂に目を向けて  
朝の誕生を見てごらん  
木々の間から聞こえる風の歌に耳を澄まし  
母なる大地から湧き出す生命を感じてごらん  
ほら、チェロキーのおきてがわかるだろう

『リトル・トリー』より



( Photo by (c)Tomo.Yun )

<http://www.yunphoto.net>

人は理解できないものを愛することはできないし、  
ましてや理解できない人や神に愛をいただくことはできない  
理解は年を経るほどにいっそう深まってゆき、  
命に限りのある人間のあらゆる思いや説明を超えたところ  
まで行き着くことができる。

『リトル・トリー』より



なにかいいものを見つけたとき、  
まずしなくちゃならないのはね、  
それをだれでもいいから、  
出会った人に分けてあげて、  
いっしょに喜ぶことなの。  
そうすれば、  
いいものはどこまでも広がってゆく

『リトル・トリー』より

( Photo by (c)Tomo.Yun )

<http://www.yunphoto.net>



だれでも二つの心を持っているんだよ  
ひとつの心は、からだの心（ボディー・マインド）  
からだがちゃんと生き続けるようになって、働く心なの  
もうひとつの心は霊の心（スピリット・マインド）  
霊の心ってものはね、ちょうど筋肉みたいで、  
使えば使うほど大きく強くなってゆくんだ。  
どうやって使うかということ、ものごとをきちんと理解するのに使う  
のよそれしかないの。

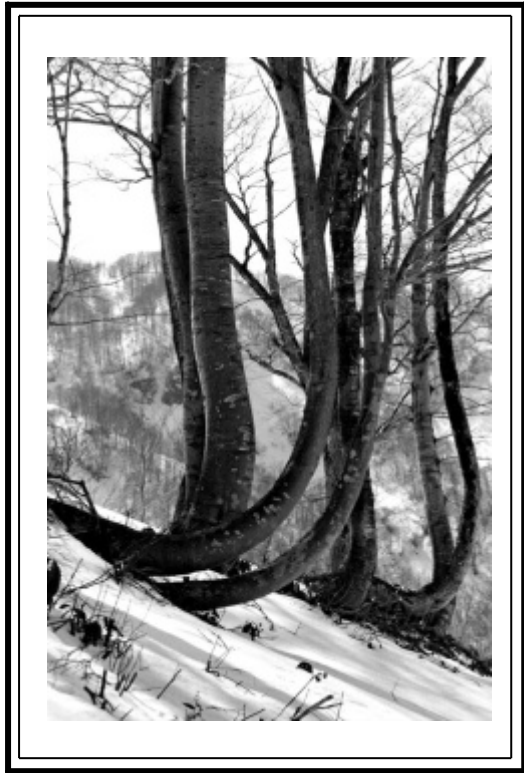
『リトル・トリー』より



ぼくは道端に腰をおろし、  
靴と靴下を脱ぎ捨てた。・・・・・・・・  
素足の裏に土のかすかなぬくもりが伝わり、  
すねから膝へ、膝からももへと、ゆっくり這い登ってくる。

『リトル・トリー』より





きつい冬も時々は必要だ、  
それがなにかをかたづけ、  
なにかをすこやかに育てる  
自然のやり方なのだ。  
例えば、  
氷は木の枝のうちの弱いものを  
選んで折ってしまう。  
もっと強い枝を出させるためだ。

『リトル・トリー』より

( Photo by (c)Tomo.Yun )  
<http://www.yunphoto.net>

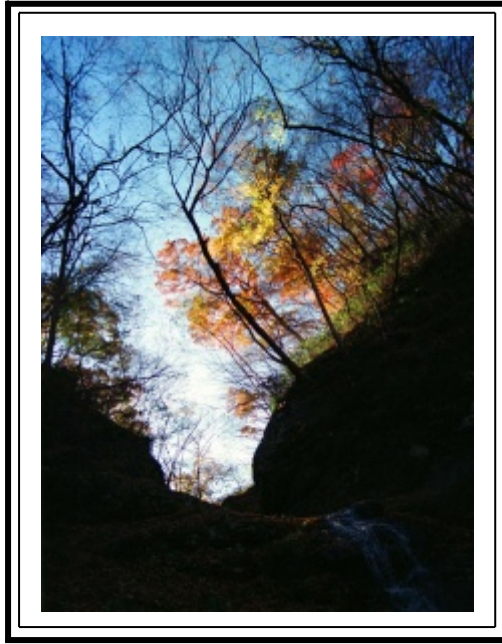




理解というものは愛と同じものなの。  
でもね、かんちがいする人がよくいるんだ。  
理解していないくせに愛してるふりをする。  
それじゃなんにもならない。

( Photo by (c)Tomo.Yun )  
<http://www.yunphoto.net>

『リトル・トリー』より



もし誰もが、人に教えたくないほど美しい秘密の場所を持っているとしたら、それはぼくにとって、  
<Red Bluff Cove (赤い絶壁の入江)>です。

．．．

ここに来るたびに、  
ぼくは悠久な時間を思います。

人間の日々の営みをしばし忘れさせる、  
喜びや悲しみとは関わりのない、  
もうひとつの大いなる時の流れです。

星野道夫『旅をする木』より

星野さんにとっての赤い絶壁の入江は、そこで地球（ガイア）とつながる特別の場所です。  
あなたにとって、そのように特別の場所は？



日々生きているということは、  
あたりまえのことではなくて、  
実は奇跡的なことのような気がします。

星野道夫『旅をする木』より



**人と出会い、その人間を好きになればなるほど、  
風景は広がりと深さを持ってきます。**

星野道夫『旅をする木』より

その人が、どのような自然（風景）の中で生きてきたのか理解する。そのとき、風景の持つ新たな本質に近づくことができるのです。

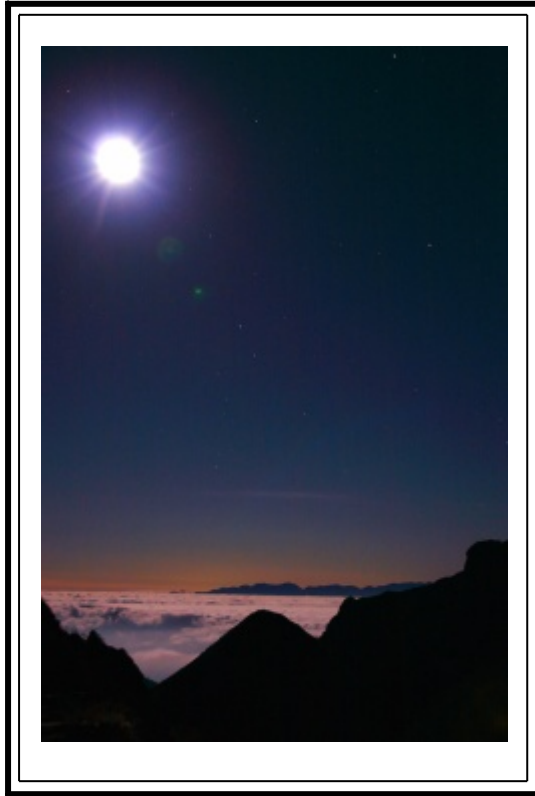


人間のためでも  
誰のためでもなく、  
それ自身の存在のために  
息づく自然の気配に、  
ぼくたちはいつも心を動かされた。

星野道夫『旅をする木』より

( Photo by (c)Tomo.Yun )

<http://www.yunphoto.net>



満天の星や泣けるような夕陽を一人で見  
たいたとすると・・・愛する人に、その  
美しさやその時の気持をどんな風に伝え  
るか？

それは  
自分が変わってゆくことだ・・・  
その夕陽を見て、感動して、  
自分が変わってゆくことだ

星野道夫『旅をする木』より



ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実にゆったりと流れている。

日々の暮らしの中で、  
心の片隅にそのことを意識できるかどうか、  
それは天と地のさほど大きい。

星野道夫『旅をする木』より

アラスカで目前にザトウクジラのブリーチングを見た星野の友人は、「私が東京であわただしく働いている時、その同じ瞬間、もしかするとアラスカの海でクジラが飛び上がっているかもしれない、それを知ったこと・・・」それが良かったと語った。





**私たちには、時間という壁が消えて  
奇跡が現れる神聖な場所が必要だ。**

*ジョセフ・キャンベル*

キャンベルは、このようにいっている「今朝の新聞に何が載っていたか、友だちはだれなのか、だれに借りがあり、だれに貸しがあるのか、そんなことを一切忘れるような空間、ないしは一日のうちのひとときがなくてはならない。」